

わが子虐待の早期発見と早期教育に関する考察 - 母子の愛着形成とわが子虐待の予防 -

今野義孝*・水谷 徹**・星野常夫***

Consideration of the Early Findings and Early Educational Approach to Child Abuse

- Establishing Mother-Child Attachment and Prevention of Intergenerational Transmission of Child Abuse -

Yoshitaka KONNO, Tohru MIZUTANI and Tsuneo HOSHINO

要 約

今日、わが子への虐待が大きな社会問題になっている。本研究では、特に母親によるわが子への虐待の早期発見と早期教育について文献研究を行った。その結果、母親によるわが子虐待は、母子間の歪んだ愛着関係によって形成された内的ワーキングモデルを介して世代間伝達されることが示唆された。一方、わが子虐待の世代間伝達を克服できた母親は、周囲からの社会的サポートに恵まれており、過去を語ることによって自分を癒すことが可能であった。また、妊娠中から胎児への愛着形成を支援してもらう機会に恵まれていたことが示唆された。このような知見から、わが子虐待の危険性は、妊娠中には既にある程度予見可能であることが示唆された。また、わが子虐待の予防に向けた早期教育として、胎児への愛着形成の援助の重要性が示唆された。更に、こうした知見を踏まえて、「とけあ体験の援助」を用いた支援プログラムを紹介した。

はじめに

今日、わが国ではわが子虐待が大きな社会問題になっている。厚生省（現、厚生労働省）の調査によると、児童相談所に寄せられた昨年1年間のわが子虐待の相談件数は18,804件であり、平成11年度と比較して7,000件の増加となっている。その内訳は、身体的虐待

9,337件（49.7%）、ネグレクト6,869件（36.5%）、性的虐待697件（3.7%）、心理的虐待1,901件（10.1%）である。しかし、この件数は氷山の一角に過ぎないとするのが一般的な見方である。また、親からの虐待によって命をなくした子どもの数も、増加の一途をたどっている。幸いにして虐待から生き延びることができたとしても、子どもたちの心には癒しがたい傷が残る。

法務省は、先頃、全国の少年院に収容されている男女のうち、ほぼ半数に当たる2,354人（男子2,125人、女子219人）を対象にした

* こんの よしたか 文教大学教育学部
** みずたに とおる 文教大学教育学部
*** ほしの つねお 文教大学教育学部

アンケート調査の結果を発表した(「児童虐待に関する報告書」,平成13年8月9日)。それによると,調査対象者の過半数が親から虐待を受けた経験のあることが明らかになった。

このような経験をもつ少年・少女たちが親になったとき,今度は自分たちが子どもを虐待する側に回ることが懸念される。わが子虐待は,世代間伝達のメカニズムを通して,次の世代の母親へと受け継がれ,わが子虐待が繰り返されることが指摘されている。先の厚生労働省の調査でも,主たる虐待者の割合は,父親30.2%,母親63.2%となっており,母親によるわが子虐待が圧倒的に多いことが分かる。

本研究では,母親によるわが子虐待の世代間伝達の危険性を早期に発見し,そのループを断ち切るための予防的・教育的方策の1つとして,早期における母子の愛着形成の支援について考察する。

わが子虐待の母親における自他の情緒理解に関する特徴

児童虐待に関する最初の記述は, Kempe, Silverman, Steele, Droegemuller, and Silver (1962) による "Battered Child Syndrome" とされる。それ以来,わが子を虐待する母親についての報告が相次いだ。その中で,わが子を虐待する母親は,母親自身が子ども時代に虐待を受けていたことを示唆する報告が注目されるようになった。Egeland, Jacobvitz, and Papatola (1987) や Zeanah and Zeanah (1989) によると,子ども時代に虐待を受けたと報告した親の70%がわが子を虐待していた。Hall, Sachs, and Rayens (1998) は,母親のわが子への身体的虐待の可能性は,母親自身が受けた身体的虐待や性的虐待と関係があることを見いだした。特に,子ども時代に激しい性的虐待を受けた母親は,そうでない母親と比較して,わが子への身体的虐待の可能性が6倍も高いことが分かった。

Spinetta and Rigler (1978) は,わが子を虐待する親は,社会経済的なレベルが等しい統制群の親に比べて,混乱や怒り,孤独感,孤立感,統制への恐れなどが強いことを見いだした。Altemeier, O'Connor, Sherrord, Waters, & Tucker (1986) によると,子ども時代に虐待を受けた母親は,自尊感情が低く,自分は望まれていないという感情や愛されていないという感情に加えて,攻撃傾向や孤立傾向が強く,わが子の苦痛に対して怒りの反応を示しやすいことや,子どもの泣き声に対して怒りの反応を示し,身体的虐待をする傾向があった。

Shipman and Zeman (1999) は,身体的な虐待をした母親とその子どもたちにおいて,虐待関係が子どもの情緒発達をどのように阻害するかを検討した。それによると,虐待をした母親は,情緒の理解を反映するような話し合いに参加しない傾向が見られた。

情緒理解能力は,情緒マネジメントスキルの1つのカテゴリーである。これは,自他の情緒的な経験に対して適切な反応をするために,情緒を引き起こした原因とその結果に関する情報を理解する能力である (Cassidy et al., 1992; Parke et al., 1992)。

情緒理解能力は,子どもの社会情緒的能力の本質的な要素であり,それは親子関係の中で発達するものである。また,「情緒の機能理論 (the functionalist theory of emotion)」 (Barrett et al., 1987) によると,子どもは社会的な相互作用を進展させるために,自分自身の情緒をマネージすることを学習するだけではなく,社会的な環境において重要な他者の情緒に反応するために必要なスキルをも発達させなければならない。

従って,情緒理解の乏しい親に虐待を受けた子どもは,当然のことではあるが低いレベルの情緒理解を示すことになる。これらの子どもたちは,幸福や悲しみ,怒り,恐れなどの情緒を喚起する短い文章を読み,それがど

のような情緒を表しているかを質問されたとき、怒りのようなネガティブな情緒の理解が困難だった。Barrett and Campos (1987) は、ネガティブな情緒理解の欠陥は、情緒や行動を調節することの困難や仲間関係の拒否といった問題を引き起こすことを示唆している。

このような情緒理解の困難や情緒・行動の調節の困難は、その子が親になったとき、わが子に伝達される。わが子を虐待する親の「社会的情報処理 (social information processing)」の特徴について検討した Frodi and Lamb (1980) によると、虐待をする親は、赤ちゃんが泣いているビデオに対して困惑した態度や共感性の乏しさを示した。一方、微笑んでいる赤ちゃんのビデオに対してはあまり注意を払わず、それほど幸福感を感じないと報告した。また、ビデオの赤ちゃんとの相互作用に気乗りがせず、無関心な態度を示した。

同様に Kropp and Haynes (1987) は、悲嘆や苦痛、驚き、悲しみ、喜び、関心、恐れ、怒りの表情などを表す赤ちゃんのスライドに対する親の反応について検討した。その結果、わが子を虐待する母親は赤ちゃんの情緒的なシグナルを正確に照合することができず、ポジティブな情緒のシグナルをネガティブなものだと判断する傾向が強かった。

愛着と内的ワーキングモデル

「愛着理論 (attachment theory)」によると、児童虐待は一種の関係障害であり、その世代間伝達は親と子どもの内的ワーキングモデル (internal working model) によって仲介される (Bowlby, 1973)。つまり、親から適度の感受性と愛情を与えられた子どもは、適切な自尊感情を発達させ、必要なときにはいつでも重要な他者 (important others) から養育やサポートが受けられるという確信を育むことができる。一方、親の養育態度が不適切な場合、子どもの自他に対する感情は障害され、親の無感覚な養育態度や不安や怒り

に対して種々の情緒的な反応を形成するようになる。そして、こうした情緒的な反応が内在化され、自他への情緒的かわりを決定する要因として機能するようになる。

Bowlby (1973) や Pipp and Harmon (1987) が指摘しているように、内的ワーキングモデルの原型は、感覚運動期の発達段階に形成されると考えられる。そしてその後は、思考や感情、記憶と結合し、パーソナリティにまで統合されるようになる。一般的に、感覚運動的な情報によってエンコーディングされた経験世界に対しては意識的にアクセスすることが困難である。そのため、内的ワーキングモデルは、意識化することが困難であり、変容しにくいと考えられる。

虐待を受けた子どもは、一般的に母親に対して不安定で、まとまりや方向性のない愛着を示す。母親との分離不安によるストレスや母親との再会に対処するための、整合的な対処メカニズムを欠いている。つまり、虐待を受けた子どもは、母親を回避した後に接近を求めるといった矛盾した行動を示したり、母親と再会したときに母親を見ないといった行動を示す。これらの行動は、恐怖と愛着が同時に活性化されたことによるものであり、母親への接近と回避の葛藤的な動機づけを示している。

Morton and Browne (1998) によると、虐待を受けた子どもは、親に対して「無反応で拒否的である」という表象を形成する。一方、自分自身に対しては「価値がなく、適切な注意を引きつけることができず、愛着の対象から養育を受けることができない」という表象を形成する。この早期における心的表象の形成は、将来の親子関係や対人関係の原型となる。幼児期に安全な愛着を受けることができなかった子どもは、将来わが子に対して安全な関係を形成することが困難になる。

ところで、乳幼児期は間主観性 (intersub-

jectivity) を介して、養育者の緊張と不安を敏感に察知する時期である。従って、親が否定的感情を抱きながら赤ちゃんに接すると、赤ちゃんはそのことを敏感に察知して偏った反応を示すようになる。その結果、母親との間に相互作用の悪循環が生まれる。

Perry (1997) は、虐待を受けた子どもの愛着の障害を神経生物学的観点から検討している。それによると、早期幼児期における虐待や無視は大脳機能の不調をもたらし、愛着と共感を媒介する皮質や皮質下の抑制機能を低下させる。また、間脳や脳幹におけるストレス反応システムの過剰な興奮は、衝動性や多動性をもたらすとともに、暴力に対する閾値の低下などをまねくと考えられる。

Bremner, Randall, Vermetten, and Stab (1997) や Stein, Koverola, and Hanna (1997) によると、身体的虐待や性的虐待による心的外傷後ストレス障害 (PTSD) は、重度の解離障害と左脳の海馬の縮小をもたらす。このことは、視床下部によってコントロールされているアドレナリンのアンバランスと関連したグルココルチコイドの過剰分泌をもたらす。その結果、海馬の働きと短期記憶の障害がもたらされると考えられる。

また、外傷的な体験は、顕在的でナレーティブな記憶よりも潜在的な記憶に蓄えられ、漠然とした感覚イメージとして検索される。それらはコミュニケーションな言語に翻訳されにくいという性質も持っている。そのため、外傷的な体験は容易に反復され、再活性化されると考えられる。

母親の愛着型と子どもの愛着型の関係

わが子虐待の世代間伝達において伝えられるのは虐待の暴力行為そのものではなく、虐待の体験によって形成された内的ワーキングモデルであると考えられる。Main and Weststone (1981) は、母親の内的ワーキングモデルを評価するため、成人愛着モデルを開発

し、成人の愛着型を次の4つの類型に分類した。

安定自律型 (secure-autonomous): 実感をこめ、正直にゆとりをもって自分の体験を話すことができる。

不安定離脱型 (insecure-detached): 実感が乏しく、建て前を語る口調で、親を「良い親でした」と美化するが、具体的な思い出を語るができない。

不安定没入型 (insecure-preoccupied): 夢中で過去の葛藤的な出来事を語り続ける。

不安定未解決型 (insecure-unresolved): 過去の外傷的な体験や対象喪失に心的エネルギーの大部分が奪われ、現実の世界に心が向かない。

子どもの愛着型と母親の愛着型を対比した研究では、不安定没入型の母親には、混乱型の子どもの高い割合で出現することが報告されている。Morton and Browne (1998) は、12カ月前後の幼児の愛着を評価するためにデザインされた実験室的なstrange situation手続き (Ainsworth et al., 1978) を用いて、次の3つの愛着のパターンを見出している。

安全な愛着パターン。

不安定で回避的な愛着パターン。

不安定でアンビバレントな愛着パターン。

このうち、不安定な愛着をしていると分類された母親は、わが子への感受性が乏しかったり、接近や反応が乏しく、不適切にかかわる傾向があった。不安定で回避的な幼児の母親は、より拒否的で、怒りっぽく、侵襲的なかわりをする傾向があった。こうした母親の子どもは、そのような母親の養育態度を処理するような行動的ストラテジーを形成していることが分かった。つまり、母親と分離されている間、子どもはわずかなストレスや混乱しか示さなかった。そして、再び母親と一緒にされたときは、母親への接近を求めるよりも、むしろ母親を回避する傾向を示した。

不安定でアンビバレントな幼児の母親は、ひきこもり、無関心、首尾一貫性のなさとして特徴づけられる。その結果、strange situationにおいて、アンビバレントな幼児は、母親から分離されたりその恐れのあるとき、大きな苦痛を示した。そして、母親が反応したときも、幼児はアンビバレントに反応し、母親のかかわりによって気持ちが落ち着くことはなかった

(Carson, et al., 1989; Crittenden, 1988)。

これらの結果は、愛着は母親と子どもの間の双方向性の関係で生じるものであることを示している。更には、その関係性の中で、子どもの反応は母親の行動を維持する働きをしていることを示している。

三宅(1988)によると、虐待を受けた子どもは、一般的に次のような愛情欠損性格を形成しやすい。

自我機能が全般的な障害を受けている。
歪んだ対象関係しか確立できていないため、他者との間に親密な関係を持続しにくい。

根深い対人不信と、その逆の、限りない愛情希求があり、その両方の間を揺れ動く。そして、過度に相手を理想化し、相手を自己の欲求をすべて満たしてくれる万能な人物と見る一方で、その期待が裏切られると「見捨てられた不安」に圧倒され、抑うつ的で無気力となるか、敵意や怒りや恨みを爆発させる。

攻撃者への同一視が見られ、衝動の統制ができにくい。ときには、自己破壊的・自己処罰的行動に走る。また、被虐・加虐の両極端を示しやすい。

セルフ・イメージが否定的で、自己評価の低さや自己卑下の傾向が顕著である。

胎児への愛着形成不全とわが子虐待

Lebovici (1988) は、母親が乳児に抱くイ

メージには、意識に浮かぶイメージから無意識のイメージまで幅があり、次の異なる3つのイメージがあると述べている。

その子固有の資質で生きている現実的な赤ちゃん像(real baby)。

幼い頃から、将来こんな赤ちゃんがほしいと思い描いてきた空想的な赤ちゃん像(imaginary baby)。

かつて自分が赤ちゃんとして生まれ育ったときの身体感覚的体験からなる幻想的な赤ちゃん像(fantasmatic baby)。

「幻想的な赤ちゃん像」は、その人の乳児期の身体感覚的体験に属しており、感覚的に生きた瞬間瞬間の不安や恐れ、怒りなどの感覚的記憶である。従って、周産期や乳児期の、虐待や無視、見捨てられなどの体験に耐えて生き延びて親になった人ほど、赤ちゃんを前にして、暗くて理不尽な情動が湧きやすい。また、無意識の葛藤が強い人ほど、心の中の暗い空想的赤ちゃん像と幻想的赤ちゃん像が実際の赤ちゃん像にオーバーラップし、安心してわが子とかかわることができなくなる。

胎児に対する妊婦の出産前の情緒的な愛着(Maternal antenatal emotional attachment; MAEA)の障害は、わが子虐待の重要な予測因子であると考えられる。Fonagy, Steele and Steele(1991)は、妊娠中の母親自身の愛着型から、生まれた子どもの1歳時の愛着型が予測できると述べている。Condon(1993)やCondon and Corkindale(1997)は、胎児への妊婦の愛着を次の4つの型に分類した。

ポジティブな没入型(positive preoccupied pattern): 胎児に夢中になり、多くの時間を親密な感情と慈愛の感情によって胎児のことを考えたり触診して過ごす。ポジティブな無関心型(positive disinterested pattern): 十分な愛着をもってはいるが、他の子どもに注意を向けなければならないことなどのために、愛着

に十分な時間をかけられない。

ネガティブな没入型(negative preoccupied pattern): 愛着モードにはいるものの、胎児に対して愛情がなかったり、アンビバレントであったり、不安を抱いている。

ネガティブな無関心型(negative disinterested pattern): 胎児にほとんど関心を示さず、情緒的に否定的な態度をとる。

Zeanah, Carr, and Wolk(1990)によると、出産前の胎児に対するイメージと生後1カ月と6カ月の赤ちゃんに対するイメージの間には一致が見られ、不安な妊婦は子どもの気性をネガティブに知覚した。また、不安な妊婦ほど自分の子どもを育てにくい子どもであると知覚した。

Kent, Laidlow, and Brockington(1997)は、胎児に危害を加えようとする妊婦は不安や抑うつに悩んでいること、胎児にアンビバレントな感情を抱いていること、パートナーとの関係に問題のあることなどを指摘している。Pollock and Percy(1999)は、ネガティブな没入型は、胎児に対する苛立ちや胎児虐待、母と子の貧困な絆、将来の児童虐待、などの危険因子であると指摘している。

胎動の知覚と愛着形成

eggersten and Benedetti(1984)によると、正常な胎動は胎児が健康であることの指標である。胎動は妊娠18週目頃に最初に感じられる。そして、29週と38週の間には最大になり、満期の少し前には幾分減少する。Sontag(1966)によると、少なくとも妊娠第 期における母親の重篤な情緒障害は、胎児の活動レベルの異常な増加を引き起こす。つまり、妊婦が情緒的に苦痛なほど胎児のキックが強くなり、その激しさは正常の10倍にも達する。妊婦の極度の疲労はより頻繁で激しい胎動と関連して。一方、妊婦が安静な状態にある

ときは、心地よい胎動が増加する。また、妊娠中にトラウマに悩まされた妊婦の胎児は、先天的な欠陥はもっていないにもかかわらず、出産後にイライラしたり、多動で排便の問題や摂食の問題などを現しやすい。

Zeanah, Carr, and Wolk(1990)によると、妊娠中の赤ちゃんに対する妊婦のイメージは、妊娠の3期間を通して変化する。第 期(4カ月まで)は、赤ちゃんの性質や機能について記述することは困難で、大部分の妊婦は胎児がどのようなものかをイメージすることができないと報告した。実際には、自分のお腹の中に赤ちゃんがいることを信じていることができなかった。しかし、第 期(5カ月から7カ月)までには、ほぼ3分の2の妊婦が、赤ちゃんは自分が愛着を感じる対象であると確信していた。更に第 期の36週までには、ほとんどの妊婦が胎児が「人間」であると確信しており、胎児の性質や能力に関して第 期の頃と比較してはるかに正確な報告をした。

また、自分たちの赤ちゃんについての両親のイメージ評定によると、妊娠33週から37週までに、両親とも赤ちゃんの気性について安定した知覚を抱いていた。そして、この知覚と生後1カ月と6カ月の知覚の間には中程度の正の相関が見られた。

Heidrich and Cranley(1989)によると、妊娠初期における胎動の知覚は胎児への愛着と正の関係にあり、愛着は妊娠の経過とともに増大することを報告している。このように、母親と子どもの関係は、妊娠中にはじまる。その関係は、着実に成長しつつある胎児への現実的な感覚とともに、ファンタジーをもともなっている。胎児への愛着として記述されるこの関係は、妊娠の発達の課題であるとともに、首尾一貫した母子の適応のための重要な前提条件であると考えられる。つまり、胎動は、母親の胎児に対する知覚と愛着感情の変化をもたらす重要な要因であり、妊娠の早期に胎動を経験することは、出産前と出産

後の愛着行動と正の関係があると考えられる。

Zeaman, Carr and Wolk (1990)によると、愛着の形成には胎児の動きや成長を自分の身体の内側で感じる事が重要である。超音波スキャンは胎児を視覚的に観察するものであり、それは必ずしも内側で感じる体験と同じような感情を喚起しない。逆に、エイリアンのような不気味さを感じる妊婦もいることが報告されている。

Reading, Cox, Sledmere, and Campbell (1984)によると、多くの女性は胎動が明確に知覚されるまでは、妊娠の状態に対してネガティブな態度やアンビバレントな態度を経験するが、胎動を感じ始めると、妊娠に対して受容的で積極的な態度をとるようになる。このことは、胎動の感受性が妊娠の「受容」と関係することを示唆している。更に、16週と32週、出産前の24時間以内、それに産後3カ月の時点で行った質問紙調査によると、次の点が明らかにされている。

胎児との愛着得点は、妊娠期間を通じて直線的に上昇する。

妊娠16週で胎動を報告した妊婦は、全ての評価時点で高い愛着得点を示す。

出産時におけるわが子に対する反応と産後の母親の気分の評価は、3カ月の時点における母親の赤ちゃんに対する愛着の重要な予測因子である。

超早期介入としての胎児への愛着形成

Kent, Laidlaw, and Brockington (1997)は、胎児に危害を加えようとする母親は不安や抑うつに悩んでいること、胎児にアンビバレントな感情を抱いていること、パートナーとの関係に問題を持っていることなどを見いだした。Condon (1986)は、ある母親には妊娠第1期と第2期に、「境界例的な」特徴が観察されることを指摘している。これは、ホルモンによって一時的に誘発されるもので、混沌とした認知や情緒的不安定、衝動性の増

加などによって特徴づけられる。このような状態は、胎児への「情緒的な愛着」に著しい歪みをもたらし、虐待の重要な準備因子となることが示唆される。

最近の研究によると、出産前の情緒的愛着には、2つの際だった次元が存在する。それは、愛着パターンの質と量である (Condon et al., 1997)。胎児に対する愛情経験の質的次元は、次の感情やイメージなどによって構成されている。

「接近・隔たり」(closeness-distance)の感情。

「優しさ・苛立ち」(tenderness-irritation)の感情。

「肯定的・否定的」(positive-negative)の感情。

「明瞭・曖昧」(clear-vague)なイメージ。

「人・モノ」(person-thing)としての概念。

胎児は自分のwellbeing (安寧)のために母親を必要としているという認識。

一方、愛着の量ないし強さの次元は、母親が胎児について考えるために費やす時間や、胎児に対する母親の関心の強さから構成されている。つまり、母親が胎児に話しかけたり、胎児に関する情報を収集したり、胎児を夢に見たり、胎児をお腹の上から触診したり、胎児についての想像を思いめぐらす、などをどの程度行うかである。

胎児に対する愛着を形成することは、わが子虐待の発生を防止し、虐待の世代間伝達を断ち切るための重要なストラテジーの1つと考えられる。小林 (2000)は、胎児への愛着形成には、お腹の中の赤ちゃんに向かって両親が愛情をこめて語りかけることが大切であり、このことがわが子虐待の危険性を軽減すると示唆している。Heidrich and Cranley (1989)やReading, Cox, Sledmere, and Campbell (1984)は、妊婦が妊娠初期に胎動を感じるこ

は胎児への愛着と正の関係にあり、愛着は妊娠の経過とともに強くなることを見いだした。このように、胎児の動きや成長を自分の身体の内側で感じることは、胎児に対する妊婦のポジティブな知覚と愛着をもたらす重要な要因であり、妊娠早期に胎動を経験することは、出産前と出産後の愛着形成と正の関係があると考えられる。

今野・吉川（未発表（注））は、動作法の援助技法の1つである「とけあう体験の援助」（今野，1997）を用いて胎児への愛着形成を試みている。「とけあう体験の援助」は、快適な心身の体験によって、心身の安定、不安や恐怖の改善、不合理な信念の改善、対人関係の改善、他者との快適な情緒の共有などを図るものである。その基本的な仮説は次のとおりである。

被虐待体験のある妊婦は、妊娠にとまなう心身の不調や変調によって過去の忌まわしい記憶が活性化され、怒りや憎しみを胎児に向けやすくなる。これに対して、「とけあう体験の援助」は母親の心身の安定を図り、憎しみや怒りの感情を軽減するとともに、胎児へのポジティブなイメージの形成を促進する。

「とけあう体験の援助」によって、妊婦は援助者との信頼関係の中で、自分が守られているという安心感や情緒的なサポートを体験することができる。

「とけあう体験の援助」は、防衛的な緊張や抑圧的な感情から妊婦を解放し、憎しみや怒り、苦痛などの感情表出を可能にする。これは自律性中和反応や除反応と呼ばれるものであり、外傷体験によるネガティブな情動の表出を可能にするとともに、ネガティブな体験の言語化を促進し、外傷体験の癒しを促進する。

妊婦が情緒的にも身体的にも安定し、快適な気分を満たされているとき、胎児の心地よい動きが活発になる。このような

胎動の知覚は妊婦に幸福感を感じさせ、そのことによって一層胎動が活発化する。とけあう体験の援助」は、「幸福感 - 胎動の活発化」のサイクルを活性化させ、妊婦に胎児への愛着を形成する。そして、生まれてくるわが子に対してポジティブなイメージを育む。

夫が援助者と一緒に「とけあう体験の援助」を行うことによって、夫婦が胎動の喜びを共有することができる。そして、夫も胎児への愛着を形成し、夫婦が協力して子どもを産み・育てる喜びを育む。

今野・吉川（未発表）は、過去の流産の経験から妊娠や出産に対して不安を訴える妊婦、将来の育児不安を訴える妊婦、母親になることに否定的なイメージを訴える妊婦などに「とけあう体験の援助」を試みてきた。

援助は妊婦が4ないし5カ月の時点から出産予定日の2週間まで、ほぼ2週間に1回の割合で行われ、更に出産後1カ月から1年間にわたってフォローアップがなされた。1回のセッションは約60分間で、「とけあう体験の援助」と言語面接によって構成された。とけあう体験の援助は、肩、頭、背中、腰、足、腹部に行い、心身の快適な体験を援助するとともに、胎動の知覚について報告を求めた。

言語面接では、日常生活場面における胎児の反応の自己記録と妊婦の主観的幸福感の評価、および日誌法を用いて日常生活場面で生じた胎動の記録とそれについての感想などについて話し合った。また、「妊娠に対する態度」、「胎児に対する態度」、「赤ちゃんに対する態度」の3つの尺度から構成されているReading, Cox, Sledmene, and Campbell (1984)の質問紙を参考にして、妊娠に対する態度や、胎児や赤ちゃんに対する感想やイメージ、赤ちゃんに対する態度などについて報告を求めた。

これまでの試みによると、「とけあう体験の援助」は、妊婦に心身の安定をもたらすと

ともに、5カ月から6カ月の時点では心地よい胎動を誘発し、更に7カ月の時点からはより活発な胎動をもたらした。特に、腹部に「とけあう体験の援助」を行っているときに、より多くの胎動が生じた。胎動が知覚される前は、どの妊婦も自分が母親になるという実感をほとんどもつことができなかった。胎児のエコー写真を見ても、それが自分の胎内に宿っているという実感はなかった。逆に、母親になることに否定的なイメージを抱いていた妊婦は、自分の胎内にエイリアンのようなものがあるようにさえ感じた。しかし、「とけあう体験の援助」の最中に心地よく胎動を感じるによって、母親になることに対してポジティブなイメージを抱くようになった。更に、夫が「とけあう体験の援助」に加わったり、定期検診に同伴することによって、胎児に対する夫婦の愛着が形成された。また、妊娠や出産に対して不安を抱いていた妊婦は、胎児に対する愛着の形成にもなって不安が解消された。3名の妊婦はいずれも元気な赤ちゃんを産み、産後の経過も良好だった。その後のフォローアップにおいても、良好な母子関係が報告されている。

まとめと考察

わが子虐待は、感受性のない子育ての1形態である。その結果、虐待を受けた子どもは、養育者に対して無反応で拒否的であるという表象を形成する。また、自分自身に対しては価値がなく、適切な注意を引きつけることができず、愛着の対象から愛情を受けることができないという表象を形成する。この早期の心的表象は、将来の親子関係の原型となる。その結果、幼児期に安全な愛着を受けることができなかった子どもは、将来、自分自身の子どもに対しても安全な関係を築くことができなくなる。このことが、わが子虐待が次の世代へと伝達し続ける主要なプロセスである。このように、世代間において伝達されるのは

虐待の暴力行為そのものではなく、虐待という養育関係である。

それでは、こうした悲劇的な現象を改善する手だてはあるのだろうか。一般的に、虐待の世代間伝達のサイクルを断ち切った者は、どこかで自分の個人的な価値観を促進するように愛情を受けたりサポートを受けている。Gara, Rosenberg, and Herzog (1996) は、自他へのポジティブな評価と児童期の記憶のポジティブな再構成は、実際に母親が子どもを虐待していたかどうかにかかわらず、母親への安全な愛着と関係するを見いだした。つまり、虐待のサイクルを断ち切ることができた母親は、他の母親たちのポジティブな愛着モデルを経験したか、または彼女たちのネガティブなヒストリー受容し、自分自身のポジティブな側面を再評価した者たちである。

また、虐待を受けた子どもたちは、自分自身の子どもや仲間や配偶者と良好な関係をつくることができないため、不適応になると予想される。しかし、ポジティブな養育を継続的に経験することによって、愛着の表象モデルの変化を導くと考えられる (Groze et al. 1993; Pearce et al., 1994)。

Kauman and Zigler (1987) は、たとえ虐待を受けた経験があったとしても社会的サポートを受けていれば、子どもを虐待する親はほとんどいないと指摘している。虐待のサイクルを繰り返さない親は、それを繰り返す親と以下の点で異なっている。

より広範にわたる社会的サポートを受けている。

妊娠に関してアンビバレントな感情がより少ない。

子どもが身体的に健康である。

自分の幼児期の虐待の経験について隠すことなく怒りを表現し、その経験の詳細について語るができる。

多くの場合、両親のどちらか一方によってのみ虐待を受けており、成人になって

から、もう片方の親との間でより支持的な関係を築くことができている。

これらの研究は、過去に受けた虐待の事実よりも、それを現在どのように受けとめているかという「表象世界」が虐待の世代間伝達の重要な要因であることを示唆している。従って、わが子虐待の世代間伝達を断ち切るためには、親への社会的な支援や情緒的なサポートが不可欠である (Kauman et al. 1987; Bishop et al. 1999; Hunter et al. 1979; 鵜飼, 2000)。

その1つの方法として、Fraiberg (1980) によって紹介された「親子治療」がある。この方法は、親子を暖かく見守ることと、親が自分自身について「語ること」を組み合わせたものである。親自身の物語では、妊娠、出産、子ども時代、現在の状況、自分の子どもについて、あるいはその他のどんなことでも語る機会を提供する。「物語ること」は、暗黙裏に過去の経験の重要性を認識していることを意味している。治療者は「物語ること」を支援することによって、母親が無意識の過程について洞察を得ることを援助する。

こうした社会的支援に加えて重要視されるのが、胎児への愛着形成の援助である。胎児に対する母親の愛着は、胎児虐待や母と子の貧困な絆、将来の児童虐待の危険因子である。従って、母親と胎児の絆を再形成するための早期の予防的介入が、実際に起こりうる子どもへの虐待の危険を軽減すると思われる。本論文では、この点についてこれまでの母親-胎児関係の研究を概観するとともに、今野・吉川 (未発表) の試みを紹介した。ただし、この試みは、被虐待経験のある母親を対象としたものではない。今後は、実際に虐待の世代間伝達の危険性のある母親への援助を行い、胎児への愛着形成が世代間伝達を断ち切る上で有効なことを実証する必要がある。

(注) 文教大学大学院人間科学研究科博士課程の吉川延代との共同研究。

参考文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehard, M.C., Waters, E., and Wall, S. (1978) Patterns of Attachment. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.
- Altemeier, W.A., O'Connor, S., Sherrord, K.B., Waters, E., and Tucker, D. (1986) Outcome of abuse among pregnant low income women. *International Journal of Child Abuse and Neglect*, 10, 319-330.
- Barrett, K., and Campos, J. (1987) Perspectives on emotional development: A functionalist approach to emotions. In J. Osofsky (Ed.), *Handbook of infant development*. New York: Wiley.
- Bishop, S. J., and Leadbeater, B. J. (1999) Maternal social support patterns and child maltreatment: Comparison of maltreating and normal treating mothers. *American Journal of Orthopsychiatry*, 69, 172-181.
- Bowlby, J. (1973) *Separation*. Basic Books. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳 母子関係の理論 分離不安. 岩崎学術出版社, 1977).
- Bremner, J.D., Randall, P., Vermetten, E., and Stab, L. (1997) Magnetic resonance imaging based measurement of hippocampal volume in posttraumatic stress disorder related to childhood physical and sexual abuse: A preliminary report. *Biological Psychiatry*, 41, 23-32.
- Carson, V., Cicchetti, D., Barnett, D., and Braunwald, K. (1989) Finding order in disorganization: Lessons on

- maltreated infants' attachment to their caregivers. In Cicchetti, & Carson (Eds.), *Child maltreatment: Theory and research on the causes and consequences of child abuse and neglect*. Cambridge, UK : Cambridge University Press.
- Condon, J.T. (1986) The spectrum of fetal abuse in pregnant women. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 174, 509-516.
- Condon, J.T. (1993) The assessment of antenatal emotional attachment: Development of questionnaire instrument. *British Journal of Medical Psychology*, 66, 167-183.
- Condon, J.T., and Corkindale, C. (1997) The correlates of antenatal attachment in pregnancy women. *British Journal of Medical Psychology*, 70, 359-372.
- Crittenden, P. (1988) Family and dyadic patterns of functioning in maltreating families. In K. Browne, C. Davies, and P. Stratton (Eds), *Early prediction and prevention of child abuse*. Chichester, U.K: Guilford Press.
- Egeland, B., Jacobvitz, D., and Papatola, K. (1987) Intergenerational continuity of parental abuse. In J. Lancaster and R. Gelles, eds., *Biosocial Aspects of Child Abuse*. Jossey-Bass.
- Eggersten, S. C., and Benedetti, T. J. (1984) Fetal well-being assessed by maternal daily fetal-movement counting. *Journal of Family Practice*, 18(5), 771-771.
- Fonagy, P., Steele, H., and Steele, M. (1991) Maternal representations of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, 62, 891-905.
- Fraiberg, S. (1980) *Clinical studies in infant mental health*. Tavistock.
- Frodi, A., and Lamb, M.E. (1980) *Clinical Child Studies in Infant Mental Health*. Tavistock.
- Gara, M.A., Rosenberg, S., and Hezog, E.P. (1996) The abused child as parent. *Child Abuse and Neglect*, 20, 797-807.
- Groze, V., and Rosenthal, J.A. (1993) Attachment theory and the adoption of children with special needs. *Social Work Research and Abstracts*, 29, 5-12.
- Hall, L. A., Sachs, B., and Rayens, M. K. (1998) Mothers' potential for child abuse: The roles of childhood abuse and social resources. *Nursing Research*, 47, 87-95.
- Heidrich, S. M., and Cranley, M. S. (1989) Effect of fetal movement, ultrasound scans, and amniocentesis on maternal-fetal attachment. *Nursing Research*, 38, 81-84.
- Hunter, R. S., and Kilstrom, N. (1979) Breaking the cycle in abusive families. *American Journal of Psychiatry*, 136, 1320-1322.
- Kaufman, J., and Zigler, E. (1987) Do abused children become abusive parents? *American Journal of Orthopsychiatry*, 57, 186-192.
- Kempe, C., Silverman, F., Steele, B., Droegemueeller, E., and Silver, H. (1962) The battered child syndrome.

- Journal of the American Medical Association, 181, 17-24.
- Kent, L., Laidlaw, J.D., and Brockington, I.F. (1997) Fetal abuse. *Child Abuse and Neglect*, 21, 181-186.
- 小林繁一(2000) 子どもの虐待について
第38回日本特殊教育学会教育講演 .
今野義孝(1997) 癒しのボディ・ワーク
学苑社 .
- Kropp, J., and Haynes, O.M. (1987) Abusive and nonabusive mothers' ability to identify general and specific emotion signals in infants. *Child Development*, 58, 187-190.
- Lebovici, S. (1988) Fantasmatic interaction and intergenerational transmission. *Infant Mental Health Journal*, 9, 10-19.
- Main, M., and Weston, D.R. (1981) The quality of the toddler's relationship to mother and to father: Related to conflict behavior and the readiness to establish new relationships. *Child Development*, 52, 932-940.
- 三宅芳宏(1988) 児童虐待-児童福祉による援助のあり方 . 島田照三・黒川新二編母性喪失 同朋舎 .
- Morton, N., and Browne, D. (1998) Theory and observation of attachment and its relation to child maltreatment: A review. *Child Abuse and Neglect*, 22, 1093-1104.
- Pearce, J. W., and Pezzot-Pearce, T. (1994) Attachment theory and its implications for psychotherapy with maltreated children. *Child Abuse and Neglect*, 18, 425-438.
- Perry, B.D. (1997) Incubated in terror: Neurodevelopmental factors in "cycle of violence." In *Children in a Violent Society*. Osofsky, J.D. (ed.), New York Guilford.
- Pipp, S., and Harmon, R. J. (1987) Attachment as regulators: A commentary. *Child Development*, 58, 648-652.
- Pollock, P. H., and Percy, A. (1999) Maternal antenatal attachment style and potential fetal abuse. *Child Abuse and Neglect*, 23, 1345-1357.
- Reading, A.E., Cox, D.N., Sledmere, C.M., and Campbell, S. (1984) Psychological changes over the course of pregnancy: A study of attitudes toward the fetus/neonate. *Health Psychology*, 3, 211-221.
- Shipman, K. L., and Zeman, J. (1999) Emotional understanding: A comparison of physically maltreating and nonmaltreating mother-child dyads. *Journal of Clinical Child Psychology*, 28, 407-417.
- Sontag, L. W. (1966) Implications of fetal behavior and environment for adult personalities. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 134(2), 782-786.
- Spinetta, J., and Rigler, D. (1978) The child abusing parent: A psychological review. *Psychological Bulletin*, 77, 296-304.
- Stein, M.B., Koverola, C., Hanna, C. (1997) Hippocampal volume in women victimized by childhood sexual abuse. *Psychological Medicine*, 27, 951-959.
- 鵜飼奈津子(2000) 児童虐待の世代間伝に関する一考察 - 過去の研究と今後の展望 -
心理臨床学研究, 18(4), 402-411 .
- Zeanah, C.H. and Zeanah, P.D. (1989) Intergenerational transmission of maltreatment : Insight from

attachment theory and research.
Psychiatry, 52, 177-196.

Zeanah, C. H., Carr, S., and Wolk, S. (1990)
Fetal movements and the imagined
baby of pregnancy: Are they related?
Journal of Reproductive and Infant
Psychology, 8(1), 23-36.